

図書館報

光 丘

No.149

八幡よみきかせ隊の活動

八幡よみきかせ隊代表 瀬野 千恵子

(会員へのインタビューより)

すっかり定着した「読み聞かせ」という言葉。幼いころに読んでもらった優しい声の記憶を持つ方も多いことでしょう。

八幡よみきかせ隊は、平成十三年五月に酒田市文化センターで開催された読み聞かせ講座に参加した三人が「子どもたちとともに絵本の楽しさを分かち合いたい」との思いから、同年七月に結成したのが始まりで、地元における読み聞かせグループの結成は、かねてからの念願であったものでした。

現在のメンバーは十七人で、活動内容としては、毎週水曜日の午前に八幡タウンセンターで情報交換や読み聞かせの準備を行っているほか、地元である八幡地区の保育園、小中学校や介護施設を訪問して、絵本や紙芝居の読み聞かせを行っています。昨年は、県

の読育フェスティバルが縁で、東根市立長瀬小学校で四回に渡って紙芝居作り教室を行うなど、活動の範囲も大きく広がってきています。

また、平成十四年からは民話や伝統文化などを題材にした方言による手作り紙芝居を毎年一つずつ作成して、高齢者のサロンでの読み聞かせにも活用しています。

紙芝居は懐かしさとともに、方言やなじみの地名が出てきたりするので、大変に喜ばれています。

紙芝居作りは、題材を決め、時にはお話を創作し、どの場面にもどんな絵を描くか考えることから始めます。絵を描くのが得意なメンバーもいて、色塗りに仕上げまで限られた時間の中で、みんなで協力し合って完成させています。手作り紙芝居は、山形県視聴覚教材コンクールにおいて

高い評価を得ているほか、長年に渡る子ども読書を推進する活動が認められたことにより、平成二十四年度子ども読書活動優秀実践団体として、文部科学大臣賞を受賞しました。受賞を記念して実施した手作り紙芝居だけの発表会には、たくさんの方から来ていただき、私たち自身も改めて手作り紙芝居の魅力に気づくことができました。今までに作った十四作の紙芝居は大切な財産です。

読み聞かせをしている子どもたちと一体になったと実感する楽しい瞬間があります。地元の子どもたちは、幼いころから読み聞かせを聞いているため、読み聞かせの人ということで、中学生になった生徒も近所で顔を合わせると気軽に声をかけてくれます。地元の方もこちらがわからなくても覚えていてくれるなど、

継続して活動を行ってきたからその喜びを味わうこともしばしばあります。

本来、子どもは本が大好きです。今は、スポ少や習い事で忙しくても、本は楽しいと知っている子ども達ですから、時が来たら読書に時間を割いてくれると思います。

最近では、テレビやスマホに子守をさせる傾向があり、ますます活字離れが進んでいますが、幼い頃に読んでもらった本の記憶は、大きくなってもずっと心に残っていくものです。これからも絵本や紙芝居の楽しさを一緒に分かち合いながら、言葉のシャワーをたくさんふりそいでいきたいと思います。



案外目にするここのない

白鳥の生態(五)

日本白鳥の会理事 角田 分わか

採食方法のいろいろ



写真1 ついばみ採食

このシリーズの2回目に白鳥のクチバシのつくりについて述べた。そのくちばしで行う採食方法には、白鳥が自然環境に応じて行っていると思われるものが多く見られる。水田で晩秋に白鳥が落ち穂をついばんでいる姿がよく見られる。(写真1)この場合白鳥は、くちばしの先端部を使ってついでに掘り起こしたりする『ついでみ採食』(掘り起こし採食)と分類さ

れる採食方法を取っている。

また、池や河川では、水面に浮かんでいるものや水底から生えている植物等を食べる『水面採食』や『水中採食』と呼ばれる採食方法で食べる。

このように白鳥の採食方法は、その場所の自然状況や環境に応じて使い分けされているようだ。

足踏み採食と

石投げ採食

この採食行動を最初に観察



写真2 足踏み採食

した時は、水が濁っていたこともあって白鳥が水面で動いているが???だった。詳しく様子を観察しているとどうやら白鳥が水中で足踏みをしているのだがよくわからなかった。その答えが出たのは、水が澄んでいる場所でのこの行動を観察した時だ。足踏みをする時水底の泥が水中に巻き上がり、その濁っている水の中にくちばしを入れて採食していたのだ。(写真2)要するに水中で足踏みをする時水が攪拌されて泥を巻き上げる。その巻き上がった泥の中の食べ物を食べていたのだ。当然だが、この足踏み採食は、水深が1m以内でも水底が石ころの場合は行われない。水底が泥状態で行われない。



写真3 石投げ採食

水底が石ころの状態では、別の採食方法の『石投げ採食』(写真3)を用いて採食している。

この採食方法は、給餌地によく見られた。石の間に落ちている給餌された粗穀などを食べるために邪魔になる石を取り除いて食べているのです。

水底が泥の状態でも倒立採食するほど深くない場所では足踏み採食を用い、給餌地で水底が礫などの時にはその石をクチバシで投げ捨て、取り除いてから採食をしているのです。

しごき採食と

刈り取り採食

水面以外の周辺に生えている植物を採食する時にもその



写真4 しごき採食

自然の状況に応じた採食方法を使い分けています。『しごき採食』は、稲などの実生を採食する時に稲の穂をくちばしで啜ってそのまましごき取るようにして実だけをクチバシの中に取り入れるのです。(写真4)



写真5 刈り取り採食

同じような採食方法でも『刈り取り採食』はまた少し違っているのです。(写真5)この方法は、実生も食べますが生えてきた二番穂の若葉を刈り取るようにしてクチバシの横を使って食べるのです。

白鳥は、このように自然の状況だけでなく採食物の生育の違いにも応じた採食方法を用いて食べているのです。(採食方法名は、まだ未定のため著者が命名したものです)

港町・加茂のまちづくり 住民・大学生・高校生が共に創る

東北公益文科大学准教授 渡 辺 暁 雄

鶴岡市加茂地区は江戸時代、

庄内藩の外港、海上交通の要衝として発展した。北前船の中継港・避難港・風待港としての機能を備えた同港周辺には船問屋が立ち並び、そこでの取引商品は鶴岡城下はもちろん、清川を經由して最上川舟運ともつながっていた。

町並みの背後は山で覆われているためこれまで大規模な開発もなく、今も商港時代の名残を感じさせる蔵や邸宅、民家、狭い路地、港の石組み、多数の寺社仏閣を有し、港町の風情が色濃く残されている。こうした往時の繁栄に比し、近年では人口減少、少子高齢化、主要産業の衰退といった厳しい状況にある。もちろん、地区内には「クラゲ展示種世界一」で有名な鶴岡市立加茂水族館があり、二〇一四年六月のリニューアル以来、本年度七月には入館者数百五十万人を突破。大盛況である。しかし1kmと離れていない加茂の街中まで足をのびず観光客は少なく、水族館までの単な

る「通過点」となっている。住民にとつてこの状況は非常に不本意であるようだ。

こうした中、同地区は豊かな歴史文化・景観的資源により、二〇一〇年「山形県景観条例」に基づく「庄内景観回廊」モデル事業地区に指定された。住民の間でも観光や交流人口の拡大を目的としたまちづくりの機運が高まり、東北公益文科大学の学生と山形県、鶴岡市との協働が始まった。これまでの活動としては「まち歩きマップ」の作成、眺望を楽しむためのベンチの設置、地区内マンホール・デザイン公募、歩行者誘導の道路カラー舗装、駐車場から加茂水族館へ向かう人向けの「お休み処」企画、まち歩きのための「サイン」（案内標識）のデザイン・制作等々、意欲的な活動を展開している。

しかし重要なのはこうした目に見える成果のみではなく、活動を通して住民が得た「目に見えない成果」としての、まちづくりに取り組む意欲の向上

である。そうした意欲向上を促進した特徴の一つとして「大学生・高校生との協働」があり、熱心な活動の継続により導かれた「若手住民の参加」である。

○大学生・高校生との協働

活動の中でフィールドワークやワークショップを繰り返して実施したが、そこに大学生など部外者の視点が加わることで、観光資源の発見・開発や既存資源の新たな用途を生み出すこととなった。地域住民にとつてそれは意外性を伴った驚きであると同時に、外部から称揚されることで自尊心が高められる効果があった。また地域資源について住民が新参の参加者に「教える」行為は、自負心からくる喜びへとつながった。

加えて地元の加茂水産高等学校の生徒も参加することとなった。同校は昭和二十年の設立以来、多くの水産、港湾、海運関係の人材を輩出し、港を保有する加茂地区とも密接な関係を保ってきた。しかし昨今の水産業を巡る構造的な変化により地域との関係性も薄れ、生徒たちにとつても加茂地区は自宅と高校までの「通過点」となっていた。しかしまちづくり

活動を通し、生徒が住民から地域の特徴や課題を学ぶ中「加茂の色々な場所を知る良い機会となった」「こんなに楽しい場所だとは思わなかった」等の意見が聞かれた。住民としても生徒たちと身近に接することにより、地域・高校双方のつながりの持つ意味や重要性を再度確認・強化することとなった。

○若手住民の参加と活躍

参加者がどうしても中高年に偏ってしまうのは、全国のみちづくり活動における共通の悩みである。しかし加茂での継続的な活動が広く住民全体に共有される中、徐々に若手住民の参加が見られるようになった。

例えばホームページやSNSを通じて、加茂での活動を広く発信することが課題となる中、そうした作業を得意とする若手を中心に、自治振興会のホームページが立ち上がった。その中心人物であるIさんは加茂に生まれ育ち、進学・就職により他出したが、一九九五年に加茂に帰ったUターン者である。彼が加茂を離れていたほんの十年の間に「造船所は無くなる、市場での競りも、行商のおばさんの『おはようの声』も

無くなり、小学校への入学者もわずかしかない」状況を見て「愕然」とした。そのため自身もまちづくりに関わりたいと考えていたということだ。現在ホームページは地域に関する情報が詳細に挙げられており頻繁な更新はもちろん、ライブカメラの設置など多様な試みがなされている。

また今年度の主要な活動で

ある、加茂で永年活躍する「達人」へのインタビュー（「庄内の達人プロジェクト」。「光丘」一四七号参照）において、地域の「達人」とインタビューを行う庄内の高校生との間を取り持つ重要な役割を、加茂地域の若手の方々が担っている。

都市社会学者・吉原直樹が指摘しているように、もともと日本の「町内」の特徴は、多様性を受け入れるという点にある。加茂地区はさらに港町として発展し、寛容性や多様性を伝統として受け継いできた開放的な地域である。こうした開放的なコミュニティ、多様性に富んだまちづくりを目指し、来訪者との相互理解を図る。今後加茂地区がさらに寛容に、さらに開かれることで、地区内外の多くの人が集うことを期待している。

吉野弘さんの詩をめぐる対話 第5回

「樹木の詩人」の言葉による光合成

酒田・詩の朗読会 主宰 阿蘇孝子
月刊SPOON元編集長 佐藤晶子

佐藤 昨年夏、吉野さんのアン

ソロジ―作品集『花と木のうた』

が出版されました。次女の梅原

万奈さんの美しい銅版画が誌面

を飾っています。その一篇、随

想「樹木断章」で吉野さんは、

「私は樹木が好きで、これまで

樹木にかかわる詩をいくつか書

いてきた」と書いていますが、

樹木をモチーフにした作品は、

「いくつか」ではなくて「たく

さん」あるんですよ。阿蘇さ

んは、どの作品がお好きですか。

阿蘇 そうですね。どれも本当

に好きなんです。(笑)。冬か

ら春にかけての林や森の情景を

描いた詩が特に好きです。

あえて一つ挙げるとすれば、

「樹木」。この詩は、樹に対す

る吉野さんの思いがすべて込め

られていたような気がします。

中に「時折吹き寄せてくる風に

いたぶられ／錫箔のように鳴っ

ている」というフレーズがある

んですが、しんとした冬の林に

かすかに響く枯葉のはりつめた

音。秋の色鮮やかな賑わいから

銀の世界へ。季節の移ろいを音

まで聴こえる見事さで表現した

吉野さんの描写にしばれます。

同じ世界に住む、物言わぬ生命

への憧憬と尊敬が溢れた、静か

で、凜とした作品だと思います。

佐藤 「樹木」は、詩集『陽を

浴びて』に収録されていて、私

も大好きな作品です。吉野さん

は、「樹の目標は何か、完成と

は何か／もちろん、人は知りも

しない」と語り、「人の体験で

きない別の生が／樹の姿をとっ

て林をなし／ひととき／淡い冬

の陽を浴びている。私と共に」

と結んでいます。思えば、人類

は、樹木に対して横暴の限りを

尽くしてきたはずなのに、樹木

は非暴力に徹して、復讐心を持

たず、泰然として、悠久の時を

生きている。しかも、人間に安

らぎと憩いさえ与えてくれる。

吉野さんは、そのような樹木の

生命力と叡知に大いなる共感と

畏敬の念を抱いていますね。

阿蘇 山を歩いていると、岩の

間や斜面、よくこんなところか

たず、泰然として、悠久の時を
生きている。しかも、人間に安
らぎと憩いさえ与えてくれる。
吉野さんは、そのような樹木の
生命力と叡知に大いなる共感と
畏敬の念を抱いていますね。
阿蘇 山を歩いていると、岩の
間や斜面、よくこんなところか
らと思うような場所に生えてい
る樹を見かけます。よじれ、ね
じれながらも威風堂々立ち上がっ
ている。そんな樹を見ると、吉
野さんの「或る位置」という詩
を思い出すのです。「樹の位置
――それは／偶然が決めたもの
だろう」。こう語り始められる
詩は、自ら定めたわけではない
偶然の場所で、ただひたすら、
土を掴み、根を張りめぐらし、
枝を張る樹の、たくましく、ひ
たむきな生命力を描写していま
す。無垢な生命力が、ありのまま
力強く輝くさまを仰ぎ見る吉野
さんから、「ヒトは、どう生き
るの」と問われている気がします。
佐藤 以前、「ほそい梢」とい

う作品について、吉野さんにイ
ンタビューしたことがあります。
ケヤキが巨木に成長するには、
分枝に伴う発熱と痛苦に耐える
忍耐力と努力が必要はずだと
語り、続けて、こうおっしゃい
ました。「ぼくはケヤキに聞い
てみたんです。どうしてあんな
はそんなに大きくなりたいんで
すか、と。そうしたら、ケヤキ
は、こう答えました。空が好き
なんです。太陽も月も星も好き
だし、青空も好きだし、好きな
ものが全部、空にある。だから
空に近づきたいんです」。樹木
に直接インタビューできる吉野
さんにもびっくりですが、樹木
の気持ちそのままに答えられる
吉野さんにもびっくりしました。
阿蘇 『遊動視点』という吉野
さんのエッセイ集に「天使たち
から眺めたら／木々の梢は／空
から水を吸い上げる根かもしれ
ない」とリルケの詩の一節を引
用した箇所があります。空に住
む天使は、地中深く張った根を
枝の広がりで見ているのかも知
れない。この反転のイメージの
美しさ。吉野さんは、それに共
感し、地上に現れていない根の
営みに思いを馳せます。

吉野さんの詩の樹たちが、ど
れも生き生きと枝を張っている
のは、地上に現れない根が、しっ

かりと土を抱き、ふんばってい
るからにはかならないのです。
目に見えていないものを感受し、
言葉に紡ごうとする、吉野さん
ならではの表現だと思えます。

佐藤 「樹」という作品があり
ますね。「枝の繁茂しすぎた山
野の樹は／風の力を借りて梢を
激しく打ち合わせ／密生した枝
を払い落す」という、樹木の自
然剪定を取り上げた作品ですが、
吉野さんは、そこから人間同士
の自我の張り合いにまで連想を
広げていきます。樹木を注意深
く観察するだけでなく、樹木と
人間の生き方を対比させて、鋭
い批評を提示する。そこが吉野
さんの凄いとところだと思います。
阿蘇 詩集『北入曾』に「緑の
葉は光合成をいとなむ／私の言
葉は何を？」というエピグラフ
があります。草木は光合成によっ
て酸素を生成し、あらゆるもの
に還元している。私の言葉は、
そういうことができているのか。
自戒を込めた自身への問いかけ
が、読み手を立ち止まらせ、読
み手自身の内省へと導いていく。
吉野さんの詩には、そんな力が
あると思えます。

佐藤 吉野さんの作品は、今も
私たちに「いい酸素」を供給し
てくださっていますよ、と天上
の詩人にお伝えしたいですね。

たず、泰然として、悠久の時を
生きている。しかも、人間に安
らぎと憩いさえ与えてくれる。
吉野さんは、そのような樹木の
生命力と叡知に大いなる共感と
畏敬の念を抱いていますね。
阿蘇 山を歩いていると、岩の
間や斜面、よくこんなところか
らと思うような場所に生えてい
る樹を見かけます。よじれ、ね
じれながらも威風堂々立ち上がっ
ている。そんな樹を見ると、吉
野さんの「或る位置」という詩
を思い出すのです。「樹の位置
――それは／偶然が決めたもの
だろう」。こう語り始められる
詩は、自ら定めたわけではない
偶然の場所で、ただひたすら、
土を掴み、根を張りめぐらし、
枝を張る樹の、たくましく、ひ
たむきな生命力を描写していま
す。無垢な生命力が、ありのまま
力強く輝くさまを仰ぎ見る吉野
さんから、「ヒトは、どう生き
るの」と問われている気がします。
佐藤 以前、「ほそい梢」とい

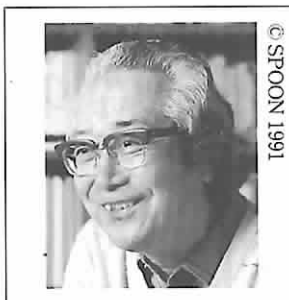
う作品について、吉野さんにイ
ンタビューしたことがあります。
ケヤキが巨木に成長するには、
分枝に伴う発熱と痛苦に耐える
忍耐力と努力が必要はずだと
語り、続けて、こうおっしゃい
ました。「ぼくはケヤキに聞い
てみたんです。どうしてあんな
はそんなに大きくなりたいんで
すか、と。そうしたら、ケヤキ
は、こう答えました。空が好き
なんです。太陽も月も星も好き
だし、青空も好きだし、好きな
ものが全部、空にある。だから
空に近づきたいんです」。樹木
に直接インタビューできる吉野
さんにもびっくりですが、樹木
の気持ちそのままに答えられる
吉野さんにもびっくりしました。
阿蘇 『遊動視点』という吉野
さんのエッセイ集に「天使たち
から眺めたら／木々の梢は／空
から水を吸い上げる根かもしれ
ない」とリルケの詩の一節を引
用した箇所があります。空に住
む天使は、地中深く張った根を
枝の広がりで見ているのかも知
れない。この反転のイメージの
美しさ。吉野さんは、それに共
感し、地上に現れていない根の
営みに思いを馳せます。

吉野さんの詩の樹たちが、ど
れも生き生きと枝を張っている
のは、地上に現れない根が、しっ

かりと土を抱き、ふんばってい
るからにはかならないのです。
目に見えていないものを感受し、
言葉に紡ごうとする、吉野さん
ならではの表現だと思えます。

佐藤 「樹」という作品があり
ますね。「枝の繁茂しすぎた山
野の樹は／風の力を借りて梢を
激しく打ち合わせ／密生した枝
を払い落す」という、樹木の自
然剪定を取り上げた作品ですが、
吉野さんは、そこから人間同士
の自我の張り合いにまで連想を
広げていきます。樹木を注意深
く観察するだけでなく、樹木と
人間の生き方を対比させて、鋭
い批評を提示する。そこが吉野
さんの凄いとところだと思います。
阿蘇 詩集『北入曾』に「緑の
葉は光合成をいとなむ／私の言
葉は何を？」というエピグラフ
があります。草木は光合成によっ
て酸素を生成し、あらゆるもの
に還元している。私の言葉は、
そういうことができているのか。
自戒を込めた自身への問いかけ
が、読み手を立ち止まらせ、読
み手自身の内省へと導いていく。
吉野さんの詩には、そんな力が
あると思えます。

佐藤 吉野さんの作品は、今も
私たちに「いい酸素」を供給し
てくださっていますよ、と天上
の詩人にお伝えしたいですね。



©SPOON 1991

吉野弘

(よしの・ひろし 1926~2014)

酒田市出身。酒田市琢成第二尋常小学校、酒田市立商業学校を卒業後、石油会社に入社。戦後は労働組合執行部で活動。肺結核闘病中に詩作を開始。1952年、『I was born』で詩壇デビュー。1957年、酒田の『新消息』より第1詩集『消息』出版。1972年、第4詩集『感傷旅行』で読売文学賞を受賞。1994年、『吉野弘全詩集』を刊行。

光丘文庫 卒寿を超えて

― その新しい旅立ち ―

光丘文庫長 中山英行

一 文庫の移転

「五丁野の内、百間を劃し、私資を投じて一寺を建立し、以て行旅接待所となし、漸次規模を拡張し、経蔵を設置し、内外の典籍を具備し、学田を寄附し、学者の修学に使せしめん事」贈正五位本間四郎三郎光丘翁事歴)

この本間光丘翁の遺志を受け継ぎ、山王の森の地に光丘文庫が設立されてから九十一年、いよいよ移転の時を迎えている。

光丘文庫の設立、所蔵書籍や稀覯本、古文書等の内容や文化的価値については、これまでも数多くの紙面を割き、紹介されてきた経緯もあり、ここでは移転に至る理由、そして今後の展望等を述べさせていただきます。

まず、結論から述べれば、移転を行う理由の第一は、来館者の方々の安心・安全の確保、そして、第二に、所蔵書籍・史資料等の適切な保管・保存に他ならない。

〈安心・安全の確保〉
第一の理由について、現在

二 蔵書点検ごぼれ話

現在、文庫では、移転に向けて所蔵資料等の点検作業を進めているが、その最中に、興味と想像を掻き立てられ、魅せられる史資料に出会うことも多い。

例えば、過去数年間の計測記録によれば、夏季には気温三十八度、湿度七十%を常に超える場所もあるなど、高温多湿の日が多く、また、湿度も雨天時や冬季には恒常的に高く、書籍や史資料に多大なストレスを与えているのが現状である。しかし、昆虫や鳥の侵入を防ぐため、窓の開放も難しく、保存環境の改善に迫られていた経過がある。

〈今後の展望と課題〉

移転を進める主な理由は前述のとおりであるが、この度の措置は、飽くまでも仮移転という位置づけにあり、現在、検討が進められている図書館の将来構想との関連で、更なる変化も予想される。

いづれにしても、酒田市と図書館の中・長期的ビジョンを

踏まえ、資料公開や情報発信等、様々な取組を講じながら、利用される方々の知的な求めに添えていくことが光丘文庫のミッションと考えている。

現在、書籍・史資料等は書庫、本館二階、そして第一閲覧室に収蔵されているが、空調設備等はなく、極めて厳しい環境に置かれている。



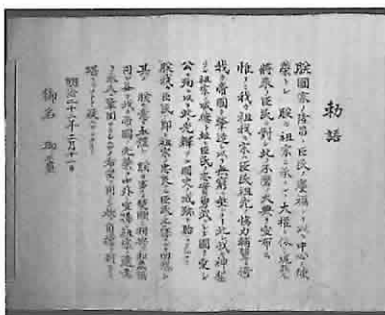
書庫3階の光景

例えば、無造作に茶色の保存紙に包まれてあった大日本帝国憲法発布の勅語もその一つである。

勅語は、当時、天皇が大権に基づき、直接国民に発した意思表示の文書である。

明治二十二年二月十一日に発布された明治憲法は、「不磨の大典」とされ、安定的に施行されたアジア初の近代憲法として、「この国のかたち」を形成する基(もと)となったわけであるが、その正本は国立公文書館に保管され、光丘文庫には、奉書に墨書揮毫された写し(写真)が保管されている。

写しは、文庫の創設以前に作成され、寄贈されたものと考えられるが、それでは誰が、何時頃、この勅語を揮毫し、どのような目的で使用したのか。また、どのような伝手を経て、光丘文庫に保管されるようになったのか等々、興味が尽きない。



勅語

確かに当時の勅語は、内容に応じて国から行政機関に送付される場合もあったが、残念ながら文庫の記録にその解答を採することは困難であった。

なお、この他に、大正十二年十一月十日に発せられた、国民精神の涵養に関する詔書、昭和十三年七月七日、日中戦争勃発一年後に発せられた国民を鼓舞する勅語、そして、各家庭にも配布、掲げられた昭和十六年十二月八日の「宣戦の詔書」等、四種類の詔勅が残されている。

其々の果たした評価は歴史家に委ね、当時の社会情勢を映し出す貴重な史資料として後世に残したい。

このように、移転にかかる作業を通しながら、文庫の持つ歴史的・文化的な資産・遺産の重みを実感するのも楽しみの一つである。



平成二十八年度の 図書館運営

図書館長 阿部 博

一 図書館の運営方針

図書館は生涯学習支援機関であり、また地域の情報センターの役割を担っています。

市民がいつでも安心して快適に利用できるように図書資料や情報の充実・整理・保存に努めるとともに、展示スペースの拡大やビジネスコーナーの設置など、積極的な図書館サービスの充実を努め、子どもから高齢者まで幅広い年齢層の利用拡大を図ります。

また、今年度から新たにスタートした「第2次酒田市子ども読書活動推進計画」に基づき、学校や保育園、関係部署等との連携により、家読(うちどく)の推進と読書手帳の活用に取り組んでいきます。

二 図書館の重点施策

① 図書館機能の充実

企画展示の常設化やリサイ

クル図書コーナーの設置など本との出会いの機会を増やし、子どもから高齢者まで幅広い年齢層の利用拡大を図ります。

また、駅前再開発事業に關連した「酒田コミュニティケ－ションポート(仮称)」におけるライブラリーセンターの整備については、都市デザイン課と連携し、今年度内での基本計画策定を目指します。

② 光丘文庫の保全と活用

光丘文庫に所蔵されている貴重な文化財等の保全のため、中町庁舎への資料等の一部を移転します。市民への資料紹介等のため、移転前の七月までの間、企画展示やギャラリートークを引き続き開催しました。

③ 子どもの読書活動の推進

今年度から新たにスタートする「第2次酒田市子ども読書活動推進計画」に基づき、学校や保育園、関係部署等との

連携により、家読(うちどく)の推進と読書手帳の活用に取り組んでまいります。

家読(うちどく)を 始めましょう

家読(うちどく)とは、家族みんなで読書を楽しむ時間を過ごし、読書をきっかけに広がる家族のコミュニケーションを大切にしようという活動です。

やり方としては、家族みんなで好きな本を読む、読んだ本や読み聞かせしてもらった本について話してみる、料理や折り紙本を読んで実際に作ってみるなど、子どもの年齢や各家庭の実情にあわせて、各家庭で工夫してみてください。

なお、本市では、毎月十九日の家族団らんの日に、パソコン・携帯電話・ゲームなどの使用を減らすメディアダイエットを心がけ、家読を行う運動を推進しています。毎月十九日には、家族みんなで読書をしてみましょう。

どんな本が良いか迷った時には中央図書館の「家読おすすめ本コーナー」を設置しておりますので、おでかけください。



光丘文庫が中町庁舎へ移転

光丘文庫については、大正十四年十二月より九十年を超える間、現在の施設を利用してまいりましたが、施設の老朽化により、今年度より2カ年かけて資料及び文庫としての機能を「中町庁舎」に移転することとなりました。

このため、8月から移転作業のため臨時休館となります。なお、来年一月中旬から、収蔵資料の閲覧については、中町庁舎で再開する予定です。展示機能を含めた文庫機能の再開は、平成二十九年度後半の予定です。

なお、市文化財となっている建物等については、今年度からその保全・活用方法の検討を進めることとしております。

総合文化センターの空調設備工事関連での図書館休館
なお、今年度は総合文化センターの空調工事により、「中央図書館・児童図書室」が十月中旬から十一月上旬にかけて休館となります。ご利用の皆様には、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

インターネット・スマホ等で 本の検索や予約が可能です

酒田市立図書館のホームページから、図書館の本の検索や予約が簡単にできます。

予約した本の受け取りや返却については、中央図書館だけでなく、ひらた・八幡・松山の分館等や、東北公益文科大学図書館でも可能です。

また、「山形県図書館横断検索」を利用すると、県内の図書館にある貸出可能な本の検索などが可能ですので、ぜひご利用ください。

酒田市立図書館ホームページ
http://library.city.sakata.lg.jp/

デザイン 佐藤 十 弥

発行

酒田市立中央図書館
酒田市立光丘文庫

酒田市中央西町二番五九号
酒田市日吉町二丁目七番七号

電話(24)二九九六番
電話(22)〇五五一番

印刷 明徴出版(株)